

とあるオタク女の受難(ハイスクールD×D編)。

SUN#39;S

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつと怪しいチラシを貰ったオタク女は魔法陣から現れた「塔城小猫」と仲良くなり、彼女に興味的にやっているアニメや漫画の技を教える。

目次

旧校舎のディアボロス

第1話	1
第2話	5
第3話	8
第4話 (塔城小猫)	11
第5話	14
第6話	17
第7話	20
第8話 (兵藤一誠)	23
月光校庭のエクスカリバー	
第9話	26
第10話	29

第1話

第1話 (木場祐斗)

第1話

第1話

第1話

第1話 (リアス・グレモリー)

47

停止教室のヴァンパイア

第1話

第1話

第1話

第1話 (浅見ゼノヴィア)

第1話

32

35

38

41

44

51

54

57

60

63

第31話	93
第30話	90
第29話	87
84	
第28話 (アーシア・アルジェント)	81
第27話	81
第26話	78
第25話	75
冥界合宿のヘルキヤット	
72	
第24話 (ギヤスパール・ヴラデー)	69
第23話	69
第22話	66

第32話 (塔城小猫)

—————

旧校舎のディアボロス

第1話

○月%日

最近、真つ白な髪の子を呼べるようになった。

自分が言ったのに、よく考えると気持ち悪い台詞だな。なんて思いながらバームクーヘンを食べて、シュークリームも食べる塔城小猫を見る。

あの細っそりとした身体はどこに入るのだろうか？と疑問を持ちながら塔城さんの会話を楽しむ。しかし、私って高校生の女の子に話しかけるヤバいお婆さんなのではないだろうか。

いや、まだ私は普通の二十代だ。

そう思い込むように復唱する。それにしても塔城さんの髪の毛は艶々で羨ましい。私も頑張っているが年のせい、私は二十代だから大丈夫だけれど。

私の趣味であるアニメや漫画の格闘技を披露し、塔城さんも一緒にやってくれた。ただ、すっごい風切り音だった。

○月&日

今日も塔城さんと呼んでしまった。

私って意外と寂しがり屋なのだろうかと思いつながら塔城さんに部屋の現れた玉璽を見せる。これ、あれなのかしら？なんて聞けば「…三国伝…ですね」と答えてくれた。

もしかして、呼べるのでは？等と冗談を言いつつ塔城さんに対価として渡す。あわよくば天玉鎧を出せるようになってほしい。

あと今日は私の個人的趣味のために作ったジムで猛虎獣烈覇やペガサス彗星拳を教えたなら喜んでくれた。なんでも加入したばかりの新人さんに強さを示したいとのことだ。

確かに私も新入社員には気を使っている。ちよつとしたミスは補ってあげ、しっかりと学んでいけるようにしてあげようね。

そう塔城さんに伝えると「…でも…あの人は変態さんです……」と言葉を返された。そ、そっか、変態なのね。えと、塔城さんも気を付けないといけないね。

私も流石に変態はフオロー出来ない。

むしろ変態は滅ぶべきだ。私の言葉に同意する塔城さんとお別れの挨拶を交わし、今後もお得意様になれるよう頑張ると伝える。

それにしても塔城さんが愚痴る程の変態とは何者なのだろうか。どこの超人なのだろうか？なんて考えながらアンケートに感想を書き、窓の外からやって来た白猫さん

に手渡す。

○月全日

塔城さんの代わりで私の家にやって来た茶髪の男の子、ほんの少しだけ精神が性欲に負けてそんな兵藤一誠とゲームしたり、アニメや漫画を見たりした。

こういう若い男の子と話すのも楽しいわね。

そんなことを考えながら塔城さんと同じように契約する？と聞いたら「ま、マジですか!？」と喜んでくれた。なんでも好意的な評価は貰えるけど、今まで一度も契約は出来ていなかったらしい。

私も君みたいな男の子は面白いから好きだけど。

こうチラチラと胸を見るのはダメよ？とさえ「ぐうつ、すいません。でも、それでも俺はおっぱいが好きなんです！」と力説された。

あんまり私には分からないけど。

本当に男の子って胸が好きなのね。

そう呟いたら「はいっ！」と元気の良い返事が返ってきた。まあ、これも兵藤さんのアイデンティティーなら私は受け入れてあげよう。

そう言えば兵藤さんへの対価は何が良いのだろうか？と問えば苦悶の表情で「小猫ちゃんと同じもので……」と呟いた。

そういう紳士的なところは好きよ。

ただ、そうなると和菓子と洋菓子になるのだけれど。こっちは建前の対価としてね、もう一つは性欲に負けず我慢できた兵藤さんのご褒美として胸枕してあげようじゃないか。

第2話

♡月、日

早朝、通勤ラッシュに巻き込まれながら通学途中の兵藤さんと塔城さんを見かけた。わりと悪魔って学校に通えるぐらい自由なのかしら？

私は趣味を優先して生きていたい。

あわよくばお金持ちの男性と結婚したい。

なんか悲しくなってきた。ま、まあ、とりあえず、今日は残業しないようにデスクワークを頑張っていこう。うん、そうしよう。

そんなことを考えていたのにバスの中は真っ黒な翼を生やした人ばかりだ。なんとも言えない羽毛に包まれて、私は夢の世界へ旅立ちそうになる。

あのバスは危険だ。下手したら眠り続けていたかもしれない。あとで塔城さんにオススメの羽毛ベッドを教えてくださいましょう。

♡月≡日

最近、山の中腹にある廃教会に出入りする人影を見たという話を聞いた。どうやら塔城さんと敵対する人たちが占拠しているとのこだ。

もっとも人間の私に出来ることなんて何も無いので、塔城さんや兵藤さんと契約して話したりすることだけだ。私は大人なのに子供に頼るしかないなんて申し訳ないな。

そう呟きながら今日も家に来てくれた兵藤さんに作ってみた龍帝剣を渡したら喜んでくれた。ただ、この前の胸枕の方が良かったらしい。

あの時は兵藤さんが契約するため欲望を我慢できたからご褒美として、やってあげようと思ったからしてあげたの。そう何度もしてあげたらご褒美の意味がないと思うでしょ？

それに私なんかより塔城さんが可愛いんだから、もつとアピールしたら振り向いてくれるかもしれないわよ？と言ったら「こ、小猫ちゃんが、おれに……」と生唾を飲み込んでいた。

やっぱり、兵藤さん騙されやすそうだわ。そんな不安を感じながら兵藤さんにレッド・フレイム ピックアップインパクト 赤い一撃と超破壊拳を教えた。

ふふん、アニメの技術って使えたりするのよ？と言ったら「お姉さん、それは流石にヤバいつす」とドン引きされたけど、やろうと思えば何だつて出来るようになるものなのよ。

♡月㍑日

ほんのちよつと呂布ツールギスのコスプレでテンションが昂ってたのは認めるけど。

いきなり、セイなんちやらギア使いかと言いがかりをつけ、襲い掛かってきた神父は絶対に泣かず。

そう塔城さんに話したら持っているのかと聞かれた。私は兵藤さんの手甲みたいなものは持ってない。むしろ持ってたら塔城さんに自慢してる。

もしも襲われたら召喚して下さいと言われた。

本当に塔城さんは優しい。その優しさを貰えるだけで私は明日も頑張っていけるわ。それに、意外と兵藤さんあたりがなんとかするんじゃないかしら？

私の言葉に首を傾げる塔城さんに五段重ねのキーキを差し出す。これ、わりと力作なのだけれど、塔城さんには物足りなかったようだ。

それにしてもエクソシストって、はぐれたりするのだろうか。カトリックとかプロテスタントとか内部分裂はあると思うけど、あれも塔城さんたちだとはぐれつつ扱いなのかしら？

まあ、私には関係無いわね。

第3話

☆月?日

いつものように玄関のアラームを鳴らす兵藤さんを部屋の中へと招き入れる。なんだか年下の彼氏が出来たみたいだな。はあ、自分で言ったくせに泣きたくなってきた。

私の溜め息に首を傾げる兵藤さんにジューズとお菓子を渡し、今日は寝ずに夜通しの映画鑑賞すると伝えたら興奮していた。

それと、えっちいやつじやないわよ。

そこまで悔しがったり、涙を流すほどガツカリするものなのかしら?なんて考えつつ、兵藤さんを抱えて座椅子に凭れる。

なんか思ってたより兵藤さんの髪の毛ってチクチクしてるのね。私の胸を樂しもうと谷間に頭を埋める兵藤さんの逞しさにクスクスと笑ってしまう。

なんだつたら次もしてあげようか?

そう耳元でポソツと呟いたら「是非、お願いします!」と清々しい顔で返された。ここまで来ると一種の才能とも思えてくるわね。

とりあえず、私もビールを飲もう。

☆月。C日

早朝、なぜか裸で倒れている兵藤さんを見ながら水を飲んで気持ち落ち着かせる。しかし、ダメだな。昨日のことが思い出せない。とりあえず、私は人と一緒にお酒を飲むのは止めておこう。

そんな情けない決意を決めつつ、のっそりと起き上がった兵藤さんに話し掛けたら苗字ではなく名前と呼ばれた。う、あ、あ、あ、あ、つ、私は兵藤さんと不純異性交遊してしまつたのか。

ちよつと自分のアホさを嘆きつつ、兵藤さんに謝つたら「あつ、えと、俺は大丈夫です。ほら、俺って悪魔なんですから！」とフオローされる。

その悪魔だからって理由でなかったことには出来ない過ちだ。まあ、うん、よし、私の貯金の七割をあげるから許してほしい。

☆月へ日

とりあえず、昨日のあれは兵藤さん曰く未遂らしいのだが頬を赤らめたり、チラチラと私を見てくるようになった。しかし、あの日の出来事を私は覚えていない。

だから兵藤さんはお酒を薦めたりしないで、私は君たちと楽しく話したいだけなんだ。そんな期待に満ちた瞳を向けないで、お姉さんだって思い出すと恥ずかしいのよ。

私の言葉に渋々ながら納得してくれた兵藤さんをジムに連れていき、塔城さんと同じ

ように本格的なアニメの拳法もしくは剣法の再現を目指す。

むしろ私は兵藤さんなら絶対に超破壊拳を使えると思っただけだ。そのセイクリッド・ギアについていう武器を使えばイケるはずだ。

そんなことを話していると兵藤さんは赤い手甲を出現させ、身体能力を二倍にするとサンドバッグを思いっきり殴った。

私のもつと兵藤さんは強いと思うのだけれど。なにか身体か精神に引つ掛かりでもあるのかしら？等と考えつつ規則的に揺れるサンドバッグを見る。

やっぱり、どうにも違和感がある。

私の予想だと兵藤さんのパンチで壁まで吹っ飛ぶか、拳が貫通すると思っただけなのに、ひよつとして手加減しているのだろうか。

第4話（塔城小猫）

私のお得意様のお姉さんはオタクというには多趣味で、アニメや漫画などサブカルチャーは勿論、園芸や工作にも手を出す人です。

それなりに私もアニメは見ます。それでもお姉さんと比べると少ない方だと思う。お姉さんといるとポカポカしたり、少しだけ眠くなったりもする。たぶん、そういう成分を分泌しているんだとイツセー先輩は言っています。

「小猫、そっちに行つたわ」

「……因果……」

私のところに飛んできたはぐれ悪魔の力に合わせて右拳を突き出す。いわゆるカウンター、お姉さんに教わった零式防衛術“因果”は相手の爆発力を利用するもの。それに悪魔の駒の特性が相乗し、はぐれ悪魔の上半身を吹き飛ばす威力を持つ。

この技術を極めれば姉様のようにならず、私は一瞬だけ浮かんだ認識を頭を振って忘れる。お姉さんや部長たちが居れば私は大丈夫です。

ゆつくりと姿勢を正して、もう一人のはぐれ悪魔と向き合う。今度はお姉さんに貰った玉璽によって召喚される天玉鎧、弩虎を呼ぶ。

「星龍斬ッ!!」

しかし、イツセー先輩の放った斬撃によってはぐれ悪魔は真つ二つになった。むうっ、私の強さをイツセー先輩に見せつけて、お姉さんを取られないようにするという私の作戦が…。

〈オカルト研究部〉

はぐれ悪魔の討伐を終えて、私とイツセー先輩は部長に呼ばれた。どうやら私の使ったものが神器に見えたらしく、どういうことなのか、どこで手に入れたのかを問われた。

「えーっと、俺のはお得意様に…」

「…私もお得意様に…」

イツセー先輩は恐る恐る金色の龍の彫りが特徴的な両刃の剣を取り出す。ことり、とテーブルに玉璽を置いて部長を見る。

「いったい、お姉さんは何者なのか。」

そんな議題が挙がるほど私とイツセー先輩の武器はすごいもので、部長達もも肖ろうか迷っているそうです。私とイツセー先輩は、とくに問題ないと思いますと伝えた。

「たぶん、部長じゃなくても俺や小猫ちゃんと一緒に行ったらお姉さんなら貸してくれ

ますよ?」

「……………そう……………」

「少しだけ意外そうな表情を浮かべる部長は、お姉さんが墮天使なのではないかと疑心的な言葉をこぼす。あの変なところで抜けてるお姉さんが墮天使というのはあり得ないと思いたい。」

「イツセー、今日はあなたの日だったわね」

「はい、そうですけど。も、もしかして、お姉さん家に部長も来るんですか!?!」

「ええ、そうよ。あれほど強力なものを作り出す技術者を野放しにするなんて勿体無いし、二人を気にかける理由も知りたいもの」

「笑顔を浮かべながらイツセー先輩を引き連れ、お姉さんの家へと向かう二人を見送る。私も付いていきたいけど、今回はイツセー先輩に任せます。」

「あらあら、どうしましょう?」

「そつと後ろに振り向くと二つほど書類の山が出来た。私は難しいことは分かりません。そういうのは部長たちのすることです。」

「うふふ、一緒に頑張りましたよねえ」

「……………うにゃあ……………」

第5話

◇月曜日

早朝、金髪と柔らかな微笑みの可憐なシスターに出会ってしまった。なんでも教会の掃除に使えるものを探しているらしい。

もしもの時のためにイタリア語は習っておいて良かったと思いつつホームセンターや雑貨店にあると教えつつお店まで道案内する。

どうにも来日したばかりで日本語は難しいそうだ。確かに外国と比べると言葉は同じでも意味が違ったりと日本人でも間違う人はいるわね。

そんなことを話しながら坂道を登り、ようやく見えた教会は汚かった。薄汚れた窓は勿論のこと、雑草は生えまくり、屋根は穴だらけだ。

とりあえず、私の友人のミルたんを呼んでおこう。いつもの素敵な魔法でなんとかしてくれるはずだ。あわよくば教会の修繕に協力してもらおう。

それにしても悪魔と契約しているのに、私は何で教会の修繕を手伝っているのだろうか。なんだか訳が分からなくなってきた。

まあ、すぐ終わらせればいいか。

◇月ゐ日

塔城さんと兵藤さんの仕えるリアス・グレモリーに会った。私の持っている沢山のコレクションに興味があるらしく、こうやって兵藤さんと一緒にやって来たとのことだ。ふとグレモリーさんは足を止めて、私のコレクションの一つを手を取った。すごく興味深そうに眺めながらチラリとこつちを見てくる。

ああ、なるほど、それを貸してほしいのね。

それくらいなら探せば見つかるし、いつそのことあげましょうか？と聞けば「いいえ、その必要はないわ、第一私じゃ扱えないものを貰っても仕方がないわ」と断られた。

まあ、確かに魔剣エピオンを使える人がいるとは思えないけれど。そこまでハッキリと断られると悲しくなるわ。

他にも魔剣教団の使っているレッドクイーンやデユランダル、それとカリバーンとかあるけれど。

そうグレモリーさんに伝えると「あなた、本当に一般人なのよね？」なんて言われたが、私のコレクションは勝手にやって来きものだよ。

ああ、それと我が家の御神体は触らないでね。

その神棚に鎮座してるでしょ？そのでかくてかっこいい黄金神スペリオルカイザーZのことよ。あとはヴァトラスの剣とかどうかしら？

◇月※日

早朝、私はミルトんと一緒にアーシア・アルジエントの待っている教会にトラックで向かう。

張り替え用の窓ガラスやコンクリートを用意し、最初はアルジエントさんも混じって雑草を抜いて、邪魔にならないように一塊にまとめる。

私の投げた木材を片手で受け取り、雨漏りしそうな場所の屋根の板を剥がすミルトん。私はアルジエントさんと一緒に教会の外壁をコンクリートやコーティング材で補強する。

ミルトんとアルジエントさんは瓦を重ねるように並べている間、私は窓ガラスを張り替えつつ長椅子や燭台を綺麗に掃除し、カーペット類は強力な洗剤を丸ごと使ってもみ洗いする。

そろそろアルジエントさんとミルトんを呼んでお昼ご飯にしようかな？なんて考えていると私に襲い掛かってきた神父がいたけど。

とりあえず、みんなでお昼ご飯を食べよう。

第6話

□月?日

久しぶりに我が家にやって来た兵藤さんと教会の修繕のため、私の家のお風呂を借りているアルジエントさんは知り合いだったらしい。

なんとという偶然なのだろうかと驚きつつ、楽しそうに兵藤さんと話すアルジエントさんはかわいい。なるほど、これが天使というものか。

私の言葉に首を傾げるアルジエントさん。なんとも言えないような、それでも同意できると頷く兵藤さん。二人とも仲良しで羨ましい。

うう、なんで私には出会いがないのよお…。

そう涙ながらにキッチンに立つミルさんに聞けば「それは分からないによ、でもミルさんは貴女が優しいって知ってるによ…!」と励ましてくれた。

ええ、そうね、そうよね。

少しでも早く結婚できるように女子力を磨きあげ、素敵な旦那さんを捕まえてみせる。ミルたん、結婚式でのスピーチはあなたに任せるわね。

□月%日

アルジエントさんと兵藤さんを見送って三日ほど経った頃の事だ。なぜか私とミルたんが直した教会が半壊し、アルジエントさんが悪魔（仮）になっていた。

まあ、アルジエントさんみたいな癒し系な小悪魔もありだ。塔城さんも癒し系だけれど、こうジャンルが違っているのだ。

私の言葉に同意する兵藤さんと握手を交わす。

しかし、アルジエントさんが悪魔になるなんて人生なにが有るか分からないものだ。そんなことを思いながら今後ともご鼻屑に笑うグレモリーさんに手を振って見送る。

それにしても残りの二人は紹介してもらえなかつたけど、レアキアラ的なものなのかな？とミルたんに聞けば知らないと言われた。

ただ、あの教会が半壊している理由だけは突き止めないといけない。折角、私たちが頑張つて建て直したのに壊すなんて許せない。

□月←日

最近が悪魔もジョギングする。

私は休日を利用してはいるけど、兵藤さんって毎朝走っているのだろうか？それだったら彼はすごい努力家でがんばり屋さんだ。

よく見たら後ろの方でアルジエントさんも走っているのかな？なんか今にも倒れそうなくらいフラフラしてように見えるけど。

ああ、普通に倒れちゃった。兵藤さんが気付いておんぶしてる。いいなあ、私も若かったら、今でも若いから別に問題ないわね。

私はまだ若い。

まだ、私は二十代だもん。

私はボロボロ涙を流しながら公園のベンチに座っているとグレモリーさんが話し掛けてきた。なんでもアルジエントさんのために簡易的な防御アイテムが欲しいそうだ。

まあ、それくらい探せばあるけど。

アルジエントさんって戦えるの？と聞いたら「もしものため、それにアーシアはまだ人間なのよ？私たち悪魔の戦いに巻き込んだりしないわ」と私の疑問に答えてくれた。

確かにアルジエントさんを守るために必要なものではある。私の秘蔵品を使ってアルジエントさんを絶対無敵の要塞に作り替えてあげようじゃないか。

第7話

△月?日

今日は珍しく兵藤さんが金髪の男の子と一緒にやって来た。なんでも私の持っている刀剣類に興味があるらしく、兵藤さんに着いてきたそうだ。

私の家にあるのは聖剣や魔剣ばかりだけど、兵藤さんの友達の木場祐斗が気に入るものはあるのだろうか。

ちよつとしたナレーションを呟きつつ、木場さんを見ていると眉間に皺を寄せながら「この聖剣を何処で?」と問い掛けてきた。その聖剣は洞窟の奥だったかな?わりとウザいけど。

それは自称エクスカリバーだ。

そう私が木場さんに言った瞬間、木場さんが目にも留まらぬ速さで聖剣を叩き折った。私のコレクションは貸したり、あげたりするけど、壊していいとは一言も言っていない。

ただ、すぐくやり遂げた感じの木場さんを怒れず、兵藤さんに頼んで帰って貰うことにした。しかし、よく聖剣を砕けたものだ。

いつそのこと珍獣も斬ってくれて良かったのに、そう呟いたら「ヴァカめつ、この私
がなまくらなんぞに壊されるものか！」と怒鳴られた。

△月↑日

早朝、私は休日とはいえ塔城さんたちの通う学校に来ている。なぜかと言えばグレモ
リーさんに「あなたのコレクションを少し買い取りたいの、これなら良いと思えるもの
を持つてきてもらえるかしら？」と言われたからだ。

とりあえず、私のところで余っている武器やお守りは持つてきた。それに刀剣類や銃
火器を運んだりするとき、私はドキドキが止まらなかつた。

あと、私のお気に入りは聖衣かしらね。

こういう防具を備えてあれば悪いことはないだろうけれど、あまり過信するのも良く
ないものだってある。例えば妖刀や邪剣の類いは下手したら命を吸い取ろうとする。

とくにムラマサは危険なものばかり。私も何振りか持つてはいるけど、一つを除いて
使おうとは絶対に思わない。

まあ、ここにあるのは誰でも使えるものばかりよ。そう警戒しなくていいし、なんな
ら私が使ってみてあげてもいいわよ？

△月≠日

今日は塔城さんが来た。

私のお腹や胸の辺りにグリグリと頭を押し付けたり、私に近づいたまま動かなかったりと可笑しなところが多かったが、これはこれで可愛いので彼女が飽きるまで受け入れた。

もしかして、最近兵藤さんばかり呼んでいたから拗ねて、いや、これは悩んでないのかしら？と考える。しかし、いつもクールな塔城さんがここまで悩むなんて……。いったい、なにがあつたのだろうか。

それとなく聞けば最近のグレモリーさんは不機嫌で憂いを帯びたりしているそうだ。確かに、それは一大事だ。あのタイプの女の子は、人に弱みや悩みを相談するのが苦手で、自分を追い詰めてしまうこともある。

それでも兵藤さんや塔城さん、他の部員さん達も彼女に寄り添ってあげればいい。ただし過度に近づきすぎると彼女を困らせるので適度にするのよ？

第8話（兵藤一誠）

お姉さんやみんなのおかげでアシアを死なせずに助けられた。部長や木場は俺の努力も重なってると言ってくれたけど。

俺はみんなのおかげだと思っている。それに部長は俺の籠手を神滅具と呼び、これからもっと強くなれると教えてくれた。

この籠手の強みは無制限の倍加だ。

まだ新米悪魔の俺は二回か三回が限界だけど。あの墮天使を、レイナーレをぶつ飛ばしたときに発動してくれた龍帝剣と合わせれば、みんなの力になれると思う。

そして、ゆくゆくはハーレム王になる。

ほんのちよつと前まで、そう考えていた。確かに俺はエロいことは好きだ。だけど、大切な人を失ってまで叶えたいとは思わない。この力は少しのエロさとみんなのために使うんだ。

「イツセー、そっちに行ったわよー」

「はいっー」

俺は高速で飛び回る悪魔の翼を持ったネコの行く手を阻み、その隙を突いて木場がネ

コを確保する。しかし、はぐれ悪魔の討伐の他にも悪魔のペットを回収したりするとは予想外すぎる。

「サンキュー、木場。やっぱイケメンは颯爽と問題を解決するな」

「僕は後ろから捕まえるだけだからそこまでじゃないよ、それに君のおかげで思っていたよりも早く確保も出来たからね」

「そ、そうか？」

俺は木場の言葉に嬉しさと気恥ずかしさを感じつつ、未だに唸っているケージの中のネコを見る。こいつは可愛い顔してるのに、なんで怒ってるんだ？

そう疑問に思っていると木場が小声で、俺だけに脱走の理由を教えてください。このネコの飼い主の悪魔は可愛がり、つまり好きすぎで鬱陶しいそうだ。

「おい、すげえ贅沢な悩みじゃねえか」

それから俺はネコ相手に説教してしまった。

自分を大事にしてくれる人がいる。

それだけで幸せになれるし、自分だって相手を幸せにできる。ただ、ちよつと行き過ぎた程度の可愛がりで逃げてやるなよ、お前だってその人がいなくなったら寂しいだら？

〈駒王町通学路〉

ようやく報告と会議を終えて帰れると思つたのに、アーシアは部長の開催する女子会に参加するらしく、必然的に俺と木場は一緒に帰ることになった。

いや、べつに木場と帰るのは良い。この数週間ですこそこそ仲良くなれたと思つてるし。ただ、どうして、こいつは俺のチャリに乗つてるんだ。

「なあ、木場」

「なにかな？ イッセーくん」

「なんで俺はお前と2ケツしてんの？」

そう俺が問いかけると木場は少し考えるそぶりを見せたかと思えば、スツと爽やかな笑みを浮かべたまま動かなくなつた。

あんまり深く考えるのは止めておこう。やぶ蛇はつつかない方が良いって聞いたことあるし。俺の不安とは関係無く木場は楽しそうに笑っている。

「イッセーくん、僕達も男子会でもする？」

「まあ、それくらいなら……」

「それじゃ、決まりだね」

「こーう、何て言うか、なんだかなあ……」

月光校庭のエクスカリバー 第9話

〆月A日

最近、グレモリーさんが結婚したらしい。

私は独身なのに学生結婚なんて羨ましい。

どういふ人だったのかと兵藤さんに聞けばホストっぽいけど、真剣にグレモリーさんを愛しており、今までの不貞行為や浮気癖は嘘だったかのように誠実だそうだ。

なんでも街で知り合った女性に諭され、自分のやるべきことを見付け、グレモリーさんと二人三脚で頑張ると涙ながらに教えて貰った。

むうっと膨れるアルジエントさんを宥めつつ、そつと兵藤さんに「君にはアルジエントさんがいるじゃない。そう落ち込むと彼女が可愛そうでしょ？」と諭したら「そうだ、俺はアーシアがいるんだ！」と可笑しいテンションのまま納得し、アルジエントさんに抱きついた。

わあ、すごい大胆な行為だ。

いきなりのことにテンパっているアルジエントさんにサムズアップを送りながら自

分の部屋を退出し、未だに結婚も彼氏もないまま趣味で生きてる自分の情けなさに涙を流す。

はあ、結婚したい。

〃月X日

ようやく出張から帰ってきたのに塔城さんは出てこず、兵藤さんも出てこないチラシを見る。どこか破れてるのかな？なんて思いつつ、ミルたん電話すると彼女も同じらしい。

いったい、どうしたのかしら？

そんなことを考えながら買い出しのためスーパーに向かっていると痴女を見てしまった。その近くに兵藤さんと塔城さんの他に知らない男の子がいる。

あれは変態の集会とかだろうか？

とりあえず、私に出来ることは久しぶりに会えた人とご飯を食べることだ。ひさしぶり、と兵藤さんに声をかけると「お姉さん、もう帰ってきたんすか!？」なんて言われた。な、なんで、そんなこと言うの？

私だって早く君たちに会いたかったのにひどいじゃないか。わざとらしくウソ泣きすると、なぜか塔城さんが「イツセー先輩、お姉さんを泣かせたってな部長に言いつけますよ？」と悪乗りしている。

まあ、冗談はこのくらいにして、みんな私と一緒にファミレスかお寿司屋さんにいこう。なんなら君たちも来る？と見知らぬ三人に問う。

今の主よつてことは教会の人なんだろうけど、兵藤さんが警戒してないからセーフだな。

〃月%日

まさか堕天使までいるとは予想外だ。

いくらサブカルチャーに染まっているとはいえ堕天使は蒼夜薫ぐらいしか知らない。そうゼノヴィアと紫藤イリナ、それから兵藤さんが無理やり連れてきた匙元士郎に言う
と警戒された。

とりあえず、これを見れば分かる。

そつと美しい翼の生えた青年のブログを見せると匙さんが吹き出し、兵藤さんがテーブルに突っ伏したまま震えている。

まあ、確かに外見は個性的だけど。そこまで笑うのは失礼なんじゃないの？と言うと塔城さんが「私もカオルくんのブログ、よく見えます」と言ってくれた。

ほら、分かる人は分かるものなのよ。

第10話

?月÷日

早朝、私は兵藤さん達と同じようにエクスカリバーを探して町を徘徊している。ただ、こんな時間に歩き回ったことは少なく、ほんのちよつとだけ物陰が怖かったりするのだ。

ちらりと右の裏路地を見ればエクソシストがいる。ちらりと上を見れば屋根にエクソシストがいる。ちらりと前を向けばマンホールに入るエクソシストがいる。どこを見てもエクソシストばかりだ。

ねえ、この町つて本当にグレモリーさんの管轄なのかしら?とミルたんに聞けば「うん、悪魔さんはそう言つてたによ!」と答えてくれる。

そうね、そうよね。こつちも神父さんが多いと頭が混乱しちゃつて、私は正常なはずよ。にしても、相変わらずミルたんのコスプレは完成度高いわね。

今度で良いからミシンの使い方と衣装の作り方をレクチャーしてほしい。そうミルたんに言うのと可愛らしくウインクしてオツケーしてくれた。

ふふん、持つべきものは友つてやつね。

?月へ日

昨晚、私とミルたんはエクスカリバーらしきものを振り回しているエクソシストを捕まえた。確かアルジェントさんと一緒にいたフリード・セルゼンという男の子だ。

とりあえず、ミルたんの魔法少女講座を受けさせ、この世に必要なのは愛情だとせんの、教え込んだ。ミルたんは満足げにセルゼンさんを裏路地に返し、私はエクスカリバーを拾った。

みんなにミルたんのおかげで見つかったとエクスカリバーを手渡したところ、グレモリーさん達に「あなたたちは人間なんだから無茶をしないで」と心配させてしまった。今後は気を付けよう。

そう反省していると真つ黒な翼が生えた男の人と神父っぽいオッサンが現れた。なるほど、あの人が木場さんを苦しめた元凶か…。

私は基本的に殴ったりとかするのは嫌いだし、わりと寛容なつもりだけど。人の命をゴミみたいに使い捨てるやつは絶対に許さない。

?月十日

はあ、本当に最悪だ。

みんなの前で、よりにもよって子供の前で怒るなんて大人失格だ。

しょんぼりとしながら墮天使のコカビエルの言っていた「その腕、まさか聖剣を内包

しているのか!？」という言葉の意味を考える。

私の腕はエクスカリバー。

どう考えても山羊座カプリコーンのシユラのコスプレのせいだ。そうとしか考えられない。確かに再現しようと頑張ったけど、そこまで再現しなくてもよくない？

紫藤さんやゼノヴィアさんの尊敬の眼差しが痛いほど突き刺さり、木場さんの視線が腕に注がれるのがハッキリと分かった。

どうにかしないといけないのに、私はグレモリーさんたちと一緒に学校へ来ている。コカビエルって墮天使が私との戦いを要求してきたせいだ。

もう、やってやれの精神だ。

私はコカビエルをぶっ飛ばして、木場さんが望むなら片腕を差し出そう。ああ、でも、片腕だと仕事に支障を来すかもしれない。

第11話

V月U日

先日のエクスカリバー事件を解決して、平穏な日々を取り戻せたと思ったのに、まさかゼノヴィアさんが追放されるとは思わなかった。

いや、確かに神様がいないのはビックリしたよ？それで追放されるのは可笑しいと思うのよ。そして、なぜに私のところにやって来たのか。

その理由を問えばグレモリーさんのところで悪魔になってしまおうかと考えたけど。私というエクスカリバーその物のような人の近くにいれば生きる意味が分かるかもしれないとやって来たそうさ。

そこまで大それた存在じゃないのよ？と論そうかと思っただけど。ゼノヴィアさん、かなり精神的にキツイ状態なのは丸わかりだ。

ああ、もう、仕方ないわね。

ゼノヴィアさん、今から貴女の立場は私の養子つてことになるわ。みっちり日本語は叩き込んで、兵藤さんたちと一緒に学校の学校に通ってもらおう。

それと悪いことはしちや絶対にダメよ。

▽月□日

私の家に押し掛けてきた塔城さんたちを掻い潜り、グレモリーさんにゼノヴィアさんのことを頼む。明らかに一般常識が欠けてるけど、彼女は優しい女の子だからフォローをお願い。

あとゼノヴィアさんは悪魔に誘うのはやめてね？彼女が自分で見極めて、しっかりと選んでほしいと私は思ってるわ。

そう彼女に伝えると「ええ、わかつたわ。私はゼノヴィアを勧誘したりしない。ただしオカルト研究部の部員にしてもいいかしら？」と言われ、私の隣にいるゼノヴィアさんを見る。

ほんの少しだけ考えて、何度か唸つたかと思えば「私は好きな時間に帰つてもいいだろうか？」と条件付きを提案していた。

なにか用事でもあるの？とグレモリーさんが問いかけると気恥ずかしそうに「少しばかり母親というものを長く味わいたい」と呟き、私の萌えメーカーがMAX振り切つて天元突破しちやつた。

はあーっ、うちの子が可愛すぎる。

▽月□日

おかしい、私は一般人のはずだ。

それなのにグレモリーさんサイドの偉い人と会わなくちやいけないんだ。ゼノヴィアさんサイドも会わ聞いたけど、そっちはハッキリと言えば会いたくない。

私がなにをしたって言うんだ。

確かに偉そうな墮天使を倒したり、よく原理は分からないけど。アニメや漫画、ゲームに出てくる必殺技やアイテムを使えるわよ？

それでも天使や魔王と関わるほどすごいものじゃないでしょう？とゼノヴィアさんに言えば「赤龍帝、若手の悪魔、その他にも沢山の関係者にヘンテコな力をつけさせているじゃないか」と言われた。

うーあゝあゝあゝあゝあゝあゝつ、そんなこと聞きたくなかった。もうゼノヴィアさんもヘンテコなことが起こるように願ってやる。

せいぜい恐れ戦くがいいわよ。

あ、あれ？可笑しいな。

なんかスペリオルカイザーがいる。えと、あーつ、ゼノヴィアさんに何でも良いので素敵で素晴らしい加護を授けてください。

ふふん、これでいいはずだ。

わあ、本物の黄金の騎士だ。

第12話（木場祐斗）

僕の同胞を欠陥品と決めつけ、不要と処分した元凶の一つ。バルパー・ガリレイを、エクスカリバーを、みんなと同胞が倒すための力をくれた。

狂気に染まったフリード・セルゼンの振るう聖剣を滅ぼした。それでいいとリアス部長は言ってくれた。イツセーくん、小猫ちゃん、朱乃さん、それからお姉さんとミルたんさんのおかげだ。

ただ、それでも僕は古の墮天使を切り裂いた手刀を持つお姉さんに嫌悪感を隠せず、あの人の腕を斬ろうとしてしまった。

それなのに彼女は怒りもせず、僕が突き付けていたソード・オブ・ビクトレイヤ双覇の聖魔剣で左腕を切り落とし、僕に差し出してきた。

今でもお姉さんの「少しでも君に平穏が戻るなら両腕ぐらい安いものよ」と無理して笑っている顔が脳裏に焼き付いている。

「おっす」

「おはよう、イツセーくん」

イツセーくん、君はあの日の出来事を一番気にしているのに優しく話しかけてくれ

る。僕のせいでお得意様が重症を負っているのに、どうして君は僕なんかに優しくしてくれるんだ。

〈オカルト研究部〉

「みんな、紹介するわね、新入部員の」

「まあ、ひさしぶりだな」

聖剣の芯核を回収して帰ったはずの彼女が、なぜここにいるんだ？そうイツセーくんが聞けば教会を異端として追放され、あれよあれと考えた末にお姉さんのところに行き着いたそうさ。

本当に教会は好き勝手に人命を弄び、命懸けで達成したというのに神の不在を隠すため、彼女を追放するなんて最低だ。

「ああ、それと木場祐斗だったか。彼女からの伝言だ、腕利きの医者のおかげで左腕は治るから落ち込まなくていい」

それは、つまり、彼女は元通り左腕を使えるっていうことなのかい？なんだか変な口調になっているけど、そんなことよりも彼女は平気なんだね？

「改めて、私は浅見ゼノヴィアだ」

「僕は木場祐斗、こちらこそ宜しくね」

あとでイツセーくんに頼んでお姉さんのところまで着いてきてもらおう。そして、彼女が満足してくれるまで土下座でもなんでもしよう。

「おっと危うく言い忘れるところだった」

ゼノヴィアは一呼吸おいて僕たちに、とくにリアス部長に伝えるように口を開けた。なにを言うつもりなんだろうかと考える。

「我が家の御神体は本物とのことだ」

それは、どういう意味なのだろうか？

イツセーくんを見ても首を傾げている。ひよつとして小猫ちゃんならと彼女を見ればソファがマツサージチェアのごとく揺れるほど荒ぶっていた。

「…スペリオルカイザーZが…っ…」

いったい、なにものなんだ!?

小猫ちゃんの警戒具合を見るに、そうとう強いものなのは分かるけど。スペリオルカイザーに、なんで『Z』がつくんだろうか。

べつにスペリオルカイザーでもと思いつつ、こつそりと小猫ちゃんに教わったイツセーくんに聞けば、かなり強い神様ということしか教えてもらえなかったそうだ。

第13話

〇月※日

ようやく動かせるようになった利き腕を揺らし、軽く手を握ったりする。やつぱり、すこし握力が落ちてるけど、さほど問題じゃない。

よし、さつそくゼノヴィアさんに家庭の味つてやつを教えてあげようじゃないか。私の料理は一味も二味も違うわよとフライパンを構える。

私の言葉に「おおっ！それは楽しみだ」と笑みをこぼすゼノヴィアさんが可愛い。もう、結婚できなくてもゼノヴィアさんがいればいいや、なんてことを考えてしまうほど可愛い。

ゼノヴィアさんに学校のことを聞けば兵藤さんの友達は面白い変態だと教えてくれた。うーん、ゼノヴィアさんは純粋だから変態に関わってほしくないけど、彼女が笑ってくれるなら私は黙って見守ろう。

さあ、たつぷりと食べないな。

〇月%日

早朝、ゼノヴィアさんを起こす。

お弁当を作っていると伝えて、彼女の跳ねまくった寝癖を直し、モソモソと朝ごはんを食べるゼノヴィアさんを写める。

よし、これで今日もがんばれる。

そう言えばグレモリーさんが生徒会に会ってほしいって言っていたような気がする。なにかゼノヴィアさんが悪さを、いや私のかわいいゼノヴィアさんに限って悪さするとは思えない。

うーん、うーん、どうしようか。最近是有給を使いきれって言われてるけど、一ヶ月くらい休んでしまおうか？なんて思う。

よし、そうと決まれば明日にでも学校へ行こう。ふふ、ゼノヴィアさんの驚いた顔を見るのもありね。私の完璧な変装と声帯変換があれば気付かれまい。

誰のコスプレしようかなあ？

いっそのことゼノヴィアさんの姿を真似ようか？それもせれで面白くていいかもしれない。うん、そうしよう、それでいこう。

二月 〇日

うむむつ、どうしてなんだ。

私の真庭忍法”骨肉細工”は完璧なのに髪の毛の長さや胸のボリュームが違う。あと若干の小皺、いや、そんなものはない。

これは、ただの引き釣った肉だ。…その例えだと私が贅肉まみれみたいだな。よし、生徒会室に着くまでにべつの何かに例えよう。

そんなことを考えながら廊下を歩いているとアルジエントさんを見かけ、塔城さんと木場さんを見かけ、未だに話せていない姫島朱乃とグレモリーさん、それと兵藤さんが詰め寄ってきた。

まさか、一瞬でバレちゃったか。

私の変装のどかが可笑しかったのかしら。そう塔城さんに聞けば「…においで…」と言われ、誰なのか直ぐに分かるほど臭いのかと泣きそうになった。

それでもゼノヴィアさんは気付いておらず、ずっと首を傾げながら私を見ている。とりあえず、こう、ここの関節と筋肉を動かせば元通りよ。

あとでゼノヴィアさんの授業も見に行くから宜しくね。そう伝えたらアルジエントさんと兵藤さんに慌てたように話し掛けています。

そういうところも可愛くて素敵だ。

第14話

√月○日

駒王学園生徒会の会長は悪魔、他の生徒会役員も悪魔、どこぞのノベルゲームにありそうな光景みたいだなと思ってしまった。

あの匙元士郎って男の子は主人公っぽく、セイクリッド・ギアを持っており、兵藤さんみたいに使いなすため、私の知恵を借りたいとのことだ。

しかし、知恵と言われても思い付くのは匙さんの黒い龍脈アップリケーション・ラインの光線を拡散させたり、光線を人形に編んで「吸収」と「攻撃」を同時にする。

それこそ空条徐輪のストーン・フリーをイメージすれば分かりやすい。なんだったら本を貸してあげましょうか？

あと、そういう武器は狭いところや遮蔽物の多いところでは無類の強さを誇るもの。例えば腕や身体に巻き付けければ簡易的な盾にも出来るし、やろうと思えば鞭として使えるはずだ。

まあ、こんなところかしら？と会長さんに言ったら「なるほど、リアスの言っていた通りですね」と一人で納得している。

まずは匙さんは拡散と裁縫を覚えよう。

√月▲日

会長さんと副会長さんにプレゼントしたメガネが変形し、ビームを発射すると苦情を受けたけど。それぐらい悪魔なら日常茶飯事でしょ？

ほんのちよつと会長さん達にプレゼントしただけじゃない。なによ、そんなに匙さんもプレゼントが欲しかったの？なんて聞けば「俺は普通に強くなりたいですよ!？」と叫ばれた。

だからこうして編み物をしてるんじゃない。

匙さんは、この編んでいる感覚を身体に染み込ませて、いつでも光線を縫合できるように、会長さん達を守る盾を作らなくちゃいけないのよ？

ああ、そういうえば無常矜持みたいなゲスでクズな大人にはなつちやダメよ？匙さんはがんばり屋さんで一生懸命なところが素敵なんだからさ。

不格好ながらも編み物は出来たので、次のステップにいつてもいいかな。先ずは光線を出して、先端を太くしたり細くする。

こんな感じに太ければ鈍器として、こうやって細くすれば刃物に、瞬時に使い分けることで変幻自在の手札になる。

√月\$日

ついに我が家のご神体が動いた。

ゼノヴィアさんは動くスペリオルカイザーZを眺めつつ、私の作った晩ごはんを食べている。じつと見ているせいなのか、スペリオルカイザーZが光り輝き、ゼノヴィアさんと合体した。

私のかわいいゼノヴィアさんは黄金神の使徒となってしまうのだろうか。そんなことを考えながら和布蕪を頬張るゼノヴィアさんを見つめる。

最近ばかりやトリコにハマっている。この前はらんま1/2にハマり、私のコレクシヨンを読んでいた。

ふふん、私の教育の賜物ということね。

私は久しぶりにひ晩ごはんを食べに来たミルトんにドヤツたら「ゼノヴィアちゃんを悪の道に引き込むのはダメなんだからによ！」と怒られてしまった。

第15話

⇨月八日

私の太ももを枕にして眠っているゼノヴィアさんを写メつてミルたんへ送信する。ふふん、どうよ？どうですか？これが私のかわいい子供ですよ。

それにしてもスペリオルカイザー乙の加護を持っているおかげなのか、ゼノヴィアさんの肌や髪は赤ちやんみたいに綺麗だ。

こう、もつと頬擦りしたくなるわね。

そんなことしたら変態って呼ばれて、グレモリーさんのところへ行っちゃうんだろうけど。もし、そうなったら潔く首を吊ろう。

私の決意とは関係なく気持ち良さそうに眠っているゼノヴィアさんは可愛い。しかし、どうすれば彼女を起こさず動けるんだ。

だんだんとアホになってきた頭を使い、ゼノヴィアさんを寝かせたまま動けるようになる方法を考えて、やつと思いついたのは残像を作る速度で動き回るというものだ。

私ならやれる。

そう殺ころせんせーにだってできるんだ。

私に出来ないはずがない。

とりあえず、ゼノヴィアさんの頭が落ちる前に戻ればいいんだもの。私はできる女よ、さくつとご飯の用意とお風呂の掃除を済ませる。

⇨月。日

はあ、全身筋肉痛って凄いのね。

私の筋肉痛の理由を知らないゼノヴィアさんはオロオロしている。あつ、その表情もかわいいな。もはや当たり前のようにゼノヴィアさんを写める。

すでに私のケータイはゼノヴィアさんの写真でフォルダが埋まっている。さらにミルさんの協力でゼノヴィアさん専用のアルバム製作と写真集も何冊か作っているのだ。

そのことを塔城さんに自慢したらゼノヴィアさんに憐れんだような視線を向け、兵藤さんは苦笑いしながら話を聞いてくれる。

最近は素敵なことが多くて楽しいな。

そう三人に言うとうち自分も同じだと笑って答えてくれた。こういうのを、答えを得るつていうのかしら？なんて思いながらクスリと笑う。

⇨月←日

そろそろ授業参観日だ。

もつと綺麗な服を着る？それともゼノヴィアさんやミルさんに頼んでコーデイナー

トしてもらおう？ いったい私のどっちにするべきなんだ。

そんなことを考えながらゼノヴィアさんに相談すると気負わずに決めればいいと言ってくれた。とりあえず、この前みたいに変装するべきだろうか？

いや、それだと味気ない。

いっそのことコスプレするのありだな。

フンスと意気込んでコスプレ衣装を選んでいるとミルたん「ゼノヴィアちゃんの気持ちを考えるによ、そんな格好で行ったら笑われるかもしれないによ」と優しく諭してくれた。

ええ、ありがとう。

そうね、そうよね、ゼノヴィアさんの晴れ姿なんだからカメラを優先して、私の服はミルたんのセンスに任せるわ。

私の気持ちを分かってくれたのか、ミルたんはスーツを収納しているクローゼットへ行ってくれた。ふ、ふふ、この最新型カメラならゼノヴィアさんの勇姿を見逃さずに撮影できるわ……。

第16話（リアス・グレモリー）

イツセー、小猫、祐斗、彼らはオカルト研究部のお得意様の二人であるお姉さんとミルたんを巻き込んでエクスカリバーを破壊しようと考えていた。

その過程でイツセーたちは最高位の墮天使コカビエルと出会ってしまい、私達は仕方なく傍観を止めて教会のエクソシストと共同戦線を組んだ。

おそらくコカビエルの狙いは魔王の血縁であり、人界の土地を間借りして仕切っている私かソーナ・シトリーの命を奪うことだ。朱乃とアジアは部室でお兄様へ取り次ぎの連絡を送っているけれど。

オカルト研究部と生徒会の二つの組織が総出で何重にも結界を展開している。しかし、古の墮天使からすれば紙も同然だろうと話し合った上で、結界の維持は生徒会に任せて私達は魔王様を呼ぶために時間を稼ぐこと。

こっちは悪魔が六人に人間の助っ人は三人だけという穴だらけのチームだ。私は結婚したばかりなのにとペンダントを開け、ガチガチに固まっている新郎姿のライザー・フエニックスの写真を見る。

「コカビエル、私達が貴方を止めるわ!!」

ビシッとコカビエルに指差す。

高位の墮天使は総じて自己顕示欲が強いと聞いたことがある。予め考えておいた陣形となり、イツセーが牽制としてドラゴンショットを放ち、朱乃が雷撃をイツセーの魔力弾に纏わせる。

「この程度の砲撃で倒せると思っているのか？」

そのままイツセーの魔力を打ち消そうと手を翳したところを狙う。すでに駆け出している祐斗と小猫、それとお姉さん達に合図を送る。

「小猫！祐斗！」

「…王虎…」

「不動剣翼、比翼刃、っ！」

私は呼び掛けとともに祐斗たちは飛び上がり、ミルさんが二人をコカビエルのところまで投げ飛ばし、お姉さんがゼノヴィアを放り投げる。確かに一撃一撃は質量で負けるかもしれない。

「それでも左右前後真上からの同時攻撃に対応するのは難しいでしょう!!」

「天剣武陣斬っ！」

「轟獣撃っ！」

「デュランダルっ！」

祐斗が出せる最高速度の斬撃はコカビエルを切り裂き、小猫の放った闘気がコカビエルを吹き飛ばす。私の後ろでアーシアと朱乃の治癒を受けながら限界以上に倍加するイツセーに赤龍帝からの贈り物で魔力を底上げしてもらおう。

そして、これはお姉さんが教えてくれた大魔王の使ったとされる究極の必殺技。それを私に合わせて更なる改良を重ねた破壊の権化になった。

「魔王大爆殺『終』っ!!」

私の叫び声を合図にコカビエルを取り囲んでいた数百を越える魔法陣が直線を穿つ滅びの魔力を止まることなく放たれる。

かなり殺りすぎてると思うけれども最高位の墮天使が相手なのだから仕方ない。イツセー、そんな近くで「怒らせないようにしよう」なんて言っても意味ないわよ？

「本当に倒せると思っていたのか」

私がコカビエルから目を離れた。

それが敗因だ。

ぎゅつと目を瞑っているのに向に衝撃が来ない。うつすらと目を開けるとお姉さんがコカビエルの片腕を切り落とし、私たちを守るように立っている。

やめて、逃げて、ただの人間の貴女じゃ勝てないと叫びたいのに声が出ない。ゆつくりとコカビエルに歩み寄るお姉さんが小さな声で、本当に聞こえるか聞こえないか分か

らない。

そんな小さな声で「聖剣具現、我が腕は聖剣なり」と呟いた。ねえ、いまのは、どういう意味で、あの人は教会の人間だったの？

「エクスカリバ聖剣拔刃アアアアツ!!」

その一撃は神聖な強さを持ち、コカビエルの生み出した光を飲み込みながら彼を切り裂き、何事も祐斗へ歩み寄り、一切の躊躇なく左腕を捨てた。

停止教室のヴァンパイア

第17話

#月○日

グレモリーさん家のヴァンパイア、これだけだとイマイチ理解できないけど、グレモリーさんの仲間の一人は引きこもりの吸血鬼らしい。

私は吸血鬼って人種に会うのは初めてね。

ゼノヴィアさんはあるの？と聞けば何度か戦ったことはあると教えてくれた。ゼノヴィアさん、無茶したりしてなかったかなあ…。

なんて思いながら空かずの部屋（吸血鬼封印中）に入ったら天使がいた。ゼノヴィアさんには劣るけど、ちょーかわいい半泣きの男の子が段ボールから顔を出して私たちを見てる。

私の血を吸わせれば良いのかしら？

そうグレモリーさんに問うと「あの子、血やレバーは苦手なのよ。だからお姉さんの力を借りたくて、本当は私がするべきことなのだけど。外せない会議があつて…」と話してくれた。

なるほど、会議と特訓の日取りが重なってしまったということか。そういうことなら私たちに任せてほしい、しっかりと吸血鬼というものを教え込んであげようじゃないか。

#月♀日

私はゼノヴィアさんぐらいかわいい吸血鬼の男の子であるギヤスパ・ヴラウデイに吸血鬼が主役のアニメや映画を見せて、自分の立ち位置や配役に成りきるように教えた。

その極度に怯えたりするのは自分に自信を持ってないせいだと話し、ゆつくりと自分が思い描くスタイルを心身に定着させる。

いわゆる二重人格を利己的に構築し、それを使い分けるトリガーを用意する。私の場合はイヤリングを鳴らすというものだ。

その都度に必要なタイミングで鳴らす。そうね、例えたとすれば、メガネを掛ける、リボンをほどこく、指輪をはずす、こういうのもジnkスになる。

無理に強くなろうとしなくていい。

しっかり、自分のできることを頑張る。みんなが戦っているなら少しだけ手助けを、みんなのために頑張るって覚悟を持てればいい。

あなたは怖がりだけど、優しい子だもの。私は見守ることぐらいしか出来ないけれ

ど、ゆつくり進んでいけば貴方はできる子なんだからさ。

#月♂日

私は『いい子いい子作戦』は成功し、ヴラウデイさんは怖がりながらもグラウンドを塔城さんや兵藤さんと一緒に走っている。

ゼノヴィアさんは拗ねたように膨れている。この前のヴラウデイさんにやったのは本心だけど、私の一番はゼノヴィアさんだよ。

そう言ったらスーツと私の太ももに頭を乗せ、私もよしよししてくれと言ってきた。はあーっ、もう、ほんと、ゼノヴィアさん可愛すぎる。

やっぱ、ゼノヴィアさん最高だわ。

私の独り言が聞こえたのか。ふふん、と私みたいに笑みをこぼすゼノヴィアさんにハートを射抜かれる。どうして、そんなに可愛いのおお……。

あまりにも可愛すぎるゼノヴィアさんをミルたんに報告したら「仕事中によ！」と怒られ、ヴラウデイさんは派手に転げた。

第18話

ヴ月〇日

兵藤さんのセクハラを受けたヴラウデイさんが深夜にやって来た。ゼノヴィアさんは拗ねて、私は寝不足のまま出勤し、やっと帰ってこれた。

まさか時間を止めるセイクリッド・ギアもあるなんて思いもしなかった。ヴラウデイさんも鍛えればDIOみたいになるのかしら？

ちらりと塔城さんに泣かされる彼を見る。まだ時間は掛かりそうだけど、彼なりに頑張っているんだ。しっかりとサポートしてあげないといけないね。

ヴ月%日

ゼノヴィアさんの授業態度は素晴らしく、一緒に来てくれたミルたんも褒めちぎっている。ふふん、私の子供は可愛いでしょうと自慢しながらグレモリーさんのお母さんと娘が一番かわいいと語らう。

なぜかゼノヴィアさんとグレモリーさんは顔を手で覆っているけど、そんな姿もかわいいのだ。それにしても何を騒いでいるのだろうか。

校門の近くを見るとミルたんのフェイバリットなスタイルを模したような服装の女

の子がいた。匙さんは唾然として、会長さんは顔を真っ赤に染めながら走ってくる。とりあえず、助けてあげようか。

ヴ月C日

私の元カレがいた。

しかも墮天使の総督だったらしく、私との生活は楽しかったが結婚は無理だと言われた。どうせ、私なんてオタク趣味の味気ない女よ、それでもちよつとぐらい夢見ても良いじゃない。

うゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ、私だつて結婚したいんだよおお……。そんなことをオカルト研究部で叫びながらすでに結婚しているがグレモリーさんに相談する。こんなところ子供に見せたくないけどさ、私の知り合いのほとんどが結婚してるし、私よりも年下のグレモリーさ？も結婚してるんだ。

ゼノヴィアさんにもお父さんが必要になるかもだし、みんなとも仲良くしていきたい。どうやれば結婚できるのおお……。話していたらゼノヴィアさんが「うむむ、オトウサンというのはミルたんじゃだめなのか？」と呟いた。

私を含めたみんなが一斉にミルたんを見る。

なんの迷いもなくミルたんはオッケーしてくれた。確かにミルたんならゼノヴィアさんのことも私のことも理解してくれる。

まさしく理想の男性だ。しかも私の趣味にも寛容で、いつもコスプレ衣装の製作も手伝ってくれる。たまに売り子を頼まれるけど、それも問題ない。

ミルたん、私と結婚しよう。

そう勢いよく言葉を告げる。

みんなミルたんの返しを期待し、私も期待している。その結果は「もうちよつと恋人期間を作っておくべきによ」というものだった。

つまり、それはオツケーってことね。

やた、やったよおお、結婚できるよおお…。

ゼノヴィアさんも喜んでくれている。きつと素敵な家庭を築いてみせるよ、さつそくミルたんの荷物を我が家に引っ越そうか。

ふふん、嬉しいな。

すつごく嬉しいなあ……。

第19話

○月#日

ふふん、私は最高にハッピーだ。

今なら三大勢力の和平条約の人間代表にだってなれるような気がするけど、私にはゼノヴィアさんとミルたんがいるので危ないことはしない。

そういえばゼノヴィアさんがバニシング・ドラゴンには気を付けるように言ってたけど、もしかして兵藤さんみたいな変態なのだろうか？

いや、兵藤さんはアルジエントさん一筋の熱血漢みたいになってるし、べつの意味で警戒しろってことなのかしら。それに私をドラゴンが狙ってくる理由も分からない。

兵藤さんへの挨拶と私のことを聞いたらしいけど、そんな特徴的なところ私にあるだろうか？なんて思いながら歩いていると銀髪の男の子がいた。

ずいぶんと派手な服着てるわね。

あんな堂々と『どらごん』って書かれた文字ティーを着こなすなんて相当の手練れに違いない。私じゃなかったら変人扱いで見逃しているわね。

○月◇日

私の警戒心の無さをグレモリーさんに怒られ、ゼノヴィアさんや塔城さんに心配されてしまった。もつと警戒しておけば良かったと反省し、心配してくれてありがとうと伝える。

なんか真つ赤になってる。はっ、これがニコポってやつなのか？と塔城さんに聞けば「…違います…」と呆れられた。

むう、それじゃあ、なにがあつたんだ。

ヴラウデイさんも教室だけでなく部屋にも来れるようになったけど、私か塔城さんの隣を離れようとしな。一応、私の用意した魔眼殺しのメガネは着けているけれど。

ひよつとして塔城さんのことを？なんて考えたりしながら並んでケーキを食べる二人を見る。ふふん、今の私は恋人がいるから嫉妬したりしないわよ。

むしろ二人を応援するつもりでいるわ。

○月？日

私は兵藤さんと一緒に姫島さん家の神社にいる。なんでも天界勢力、ゼノヴィアさんとアルジェントさんを追放した勢力のトップが来るそうさ。

わりと話すことの無さに困りながら姫島さんに話しかけ、私が呼ばれた理由をそれとなく聞き出そうと試みるも知らないらしい。

まあ、確かに誰に聞かれているかも分からないから仕方ないと言えば仕方ないのだから

うか。ひとりで納得していると無駄に光りながら男の人が現れた。

こういう派手な演出をリアルで見ると萎えるわねと思いつながら兵藤さんに竜殺しの剣を譲渡しようとする天使にドン引きした。

いくら天使とはいえど突然すぎるし、明らかに賄賂としか思えない。兵藤さんも姫島さんも苦笑いを浮かべて、私を見ているじゃない。

とりあえず、貰っておこう。あとで私がグレモリーさんに渡しておくよとジエスチャーを送る。私へと視線を移した天使と向き合う。

なんだか難しい話を始めたかと思えば単純な人員不足を補うために天界に加わり、私の技術やアイテムを貰いたいということだった。

丁重にお断りしておいた。

第20話（浅見ゼノヴィア）

私達を、正確に言えばお母さんを代表とした人界勢力を加えた三大勢力＋1の和平会議は滞りなく進んでいた。リアス部長も念のため、イツセーをギヤスパーのいる空き教室に配置している。

お母さんを勧誘する大天使のミカエルさま、元カレというだけで馴れ馴れしい墮天使のアザゼル、リアス部長のお兄さまという立場で近しい関係のサーゼクス・ルシファー、そんな大物とともにお母さんを見つめる白龍皇のヴァーリと名乗った男。

すごい大物ばかりのメンツだが、その中心にいるのはお母さんだ。誰よりも優しく、そして強く、私に母の温もりを与えてくれる女性だ。

「備えていたのさ、こいつらにな！」

そう叫んだアザゼルは私達を覆うほど巨大な結界を展開し、ドオオオオン!!と爆発音を発しながら倒壊する旧校舎を見る。

よく見れば段ボールを抱えたイツセーがロープ姿の集団に追い回されている。人間の魔術師、いやセイクリッド・ギアの使い手もいる!?

「木場っ！」

「うん、分かってる！」

おおよそ風の魔剣といったところかと納得し、私は木場の肩を掴んで空を駆けながらイツセーのもとへと向かう。お母さんのおかげで、この力を使える。

「光の騎士たちよ、我に力を！」

その掛け声と共に金色の軽鎧を召喚し、かつて世界を救った英霊の魂を呼び覚ます。私の大切な友を救うため、貴方達の力を貸してくれ！そうデュランダルを通して語りかける。

「サンダアアバリアントツ!!」

激しく荒々しい雷撃が魔術師を吹き飛ばし、青白い雷鳴が地面を切り裂き、イツセーたちと魔術師を分断する壁となってくれた。

しかし、私では魔術師を吹き飛ばす程度の威力しか出せないか。自分の不甲斐なさを悔やみつつ、木場が回収してくれたギヤスパーを見る。

くっ、こんなボロボロになるまで…！

木場は苦笑いしながらギヤスパーを背負っているが傷だらけだ。おそらく魔術師の中に、かなりの手練れがいたのだろう。そんなことを考えていると爆音と軋む音が聴こえてきた。

いったい、なんだと後ろに振り向くと縮小されているとはいえ教会の絵本で見たア・

ドライグ・ゴツホに跨がり、白龍皇と戦っているイツセーがいた。

「僕も負けてられないな……」

たぶん、木場の本心が自然とこぼれた。いつも笑みを絶やさない彼が真剣に、どこか切望するようにイツセーと白龍皇の戦いを見ている。

「真・天翔赤龍撃イイツー！」

イツセーは正しく赤龍帝だ。

その姿は赤ウエルシュ・ドラゴンき龍の帝王となり、白龍皇と次元を歪ませるほど凄まじい衝撃波を起し、二人は精魂尽き果てたように鎧が解除されて地面に激突した。

これは、私もうかうかしてられない。未だ軽鎧でしか呼び出せない黄金の鎧を完璧に使えるようにならなくてはな。

第21話

θ月Ω日

元カレが会長さんを脅してオカルト研究部の顧問になつたらしく、グレモリーさんは困つたように溜め息をこぼしている。

なんか、ごめんね。

あの人つて自分の趣味のためなら、なんでもする人だからと代わりに謝つたら「そんな、お姉さんのせいじゃないわよ、全部あのプリン頭が悪いんだから！」と言つてくれた。

私に出来ることなら手伝うつもりだと伝えるも近々実家に帰るらしく、私とは一ヶ月ほど会えなくなるそうさ。すごく悲しいけれど、グレモリーさんもお母さんやお父さんに甘えたいものね。

アルジエントさんと話しているゼノヴィアさんに私達も旅行に行こつか？と相談すると「そ、それなら、あれだ、えと遊園地に行つてみたい！」なんて言うのだ。

もう、私はハートはゼノヴィアさんのせいでキュンキュンしちゃつてる。もちろんミルたんも一緒よ？と言つたら兵オツケーしてくれた。

最近は毎日のようにミルキーを兵藤さんや塔城さんと見ているけど、あんまり画面に近づきすぎると目が痛くなっちゃうよ？

0月？日

たぶん、ストーカーらしき人物を捕まえた。

彼の話の聞けば人間の到達点にいる私に教示を貰いたいそうなのだが、私ってそういう認識なの？と少しだけショックを受けた。

まあ、そんなことよりも彼の相談だ。

彼は人間として人外の者達と戦いたいと、私は化け物に勝てるようになるだろうか？と苦しそうに呟き、私の言葉を待っている。

私の尊敬する人の言葉を借りるとすれば「世の中に不満があるなら自分を変えろ、それが嫌なら耳と目を閉じ口をつぐんで孤独に暮らしなさい」と言う。

少し私の言葉に困惑する彼に続けるように「それに貴方の願いを無駄だとは言わない。この世に不可能という事は一つないもの」と告げる。

それに貴方は迷ってるのよね？と問えば頷いた。

それなら私は、この言葉を貴方に贈る。

どうしても無理だって、もうだめって苦しくて、今にも諦めそうな時は「俺がやらなきゃ、誰がやる!!」って叫びなさい。

θ月○日

いやあ、昨日はいいことをしちやったわね。

ああいうのを迷える子羊って言うのかしら？なんて思いながらアニメの名言を贈ったら曹操は嬉しそうに笑っていた。

まだまだ、若いのに頑張る男の子はかつこいいもんね。ミルさんに同意を求めたら「ストーリーカーと話すのは危ないからやめるによ」と怒られた。

それは、うう、ごめんよねええ…。

お願いだから別れるなんて言わないで、もう独り身は寂しいんだ。みんな可哀想な人を見る目なんだ、あれに耐えるのは苦しいんだよお……。

こんなところゼノヴィアさんには見せられないけど、ミルさんになら見せられるよ。そう言ったらデコピンされて、溜め息を吐かれた。

うう、あ、あ、あ、あ、あ、つ、ミルたんが私に呆れる。どうせ、私は鬱陶しい女だつて嫌われてミルたんにも捨てられるんだああ……。

第22話

▼月?日

早朝、銀髪の男の子に話しかけられた。

なんでも兵藤さんが劇的な変化を得たのは私のおかげらしく、そのことで感謝された。私はとくになにもしてないと思うんだけど。

そう言っているのに変化の大部分は私と決めつけ、いずれその強さも越えてみせようと一方的に話すだけ話して帰ってしまった。

いったい、なにがしたかったのかしら？

最近話しかけてくれる人が増えて嬉しいけど、なんだか知らない人も話しかけてくるようになってきた気がする。

それはそれで嬉しいんだけど、こうも毎日のように来られると私もゼノヴィアさんも困るのよね。この前はグレモリーさんのお兄さんがやって来て、悪魔にならないか?とか聞いてきたもの。

私はミルたんやゼノヴィアさんとおばあちゃんになるまで一緒にいたいよ。悪魔になったら二人に置いていかれちゃうもんね。

▼月十日

えつちな必殺技を開発してしまい、アルジエントさんに拗ねられている兵藤さんを見ながら飛び散った私の服を見下ろす。

こういう用途じゃなくて武装解除つて目的で使えば普通に強力だと思う。今の兵藤さんなら使いこなせるだろうし、この極めて危険な邪拳無差別格闘早乙女流“海千拳”を教えよう。

きつと兵藤さんの役に立つ必殺技の数々を、この極意書と一緒に渡すから向こうでも自己鍛練を怠らないように頑張るのよ。

今まで必殺技は教えるけど、極意書や秘伝書を見せたことのなかったせいかな。私の習っている流派だと思われてるけど、それもアニメの格闘技なのよ？

そんなことを言えるような雰囲気じゃないし、喜びのあまりアルジエントさんに抱き付いている兵藤さんも良かったので黙っておこう。

まあ、一番はゼノヴィアさんだけだね。

そう兵藤さんに言ったらアルジエントさんが一番だと張り合ってきたのでアルバムやゼノヴィアさんのことを書き記した本を見せる。

ふふん、どうですか。

▼月×日

早朝、匙さんも冥界に付いてくらしい。そうなるとライバルの兵藤さんに負けないためにも必殺技を伝授しないといけないわね。

今は海千拳と対をなす山千拳を教える。本来の匙さんはテクニクを重視するスタイルだけど、兵藤さんに勝つには同じ土俵に上がるしかない。

あとアザゼルが言っていたけど、匙さんもバランス・ブレイクっていうのに目覚めかけているのよね？と問えば頷きながら「俺には劇的な変化の兆しが見えないんです」と、そう悔しそうに言葉を吐き出す。

よし、それなら会長さんに告白しなさい。

大事な時期なのは分かっているけど、匙さんの迷いは会長さんの夢を支えたい気持ち、それと自分の恋心を会長さんに打ち明けたい、その二つの思いに挟まれているからよ。

だからこそ自分の気持ちを告白して、会長さんとの関係を進展させれば至れるはずなのよ。私も告白の練習に付き合っただけだから頑張らなさい。

第23話

→月◎日

アルジエントさんの兵藤さんの力になりたいという相談を受け、私は過酷な修行になるかもしれないと脅したところ「私はイツセーさんのためなら頑張れます！」と言いつつ放った。

それじゃあ、はじめようか。

まずはセイクリッド・ギアの具現化して、癒やしを手のひらに集める。そのまま球体状に作り上げ、ゆつくりと手のひらと球体を切り離す。

今日は私を標的にしましょう。

アルジエントさんは私に向かって癒やしの弾を放り投げるように離して、そう今のは良い感じよ。ちよつと残業で荒れてた肌が艶々になっちゃったわ。

これは単純な事だけれど、アルジエントさんの能力は攻撃に使うことは出来ない。しかし、さっきの癒やしの弾は僅かではあるけど、ボールがぶつかったような衝撃もあった。

それを踏まえて、私が思い付いたものはアルジエントさんの能力の形状を変えるこ

と。自分と寸分違わない癒やしを構築し、自らを守る盾として、みんなを救う矛とする。そうすればアルジエントさんは兵藤さんと一緒に肩を並べて戦える。それに良く恋する乙女は最強って言うでしょう？

→月↓日

私との苦しく厳しい修行を乗り越えて、アルジエントさんはセイクリッド・ギアの発展させることが出来た。未だにバランス・ブレイクは使えないけれど、アルジエントさんの癒やしトワイライト・エクスペリエンスの体験は無敵だ。

ほんのちよつとやり過ぎたかしら？と不安を感じてはいるけど、アルジエントさんも頑張ったんだから兵藤さんもグレモリーさんも喜んでくれるよね。

あとヴラウディさんに発音が違うと言われ、ギヤスパーさんと呼ばせてもらうことになった。うむむ、やつぱり発音がずれていたのか。

そうよねえ、ちよつと困ってたし。

そんなことを考えながらアルジエントさんの掛け声を決める会議にてグレモリーさんのアルジエントさんが良く頑張っているときにこぼす「んーっ！」という言葉で決定した。

アルジエントさん本人は「うう、はずかしいですう…！」と兵藤さんに抱きついていて。本当に仲睦まじくて素敵な二人だ。

→月10日

塔城さんが名前で呼んでほしい。そう恥ずかしそうに言ってきた。まあ、確かにギヤスパーさんだけ名前呼びだとあれよね。

そんなことを話しながら小猫さんの放ったゴライオウ・デイバウレンを掻き消し、頭にチヨツプを入れる。

最近の小猫さんは大技に頼ろうとするせいで、無駄な動きが増えている。総合格闘技をはじめ、小猫さんは複数の格闘技を習っているけど、今は魔力や気力を使った技を多用しすぎだ。

いや、それも作戦と言えばありだ。

あまり難しく考えず、小猫さんなりに突き詰めれば強くなれるよ。私なんて趣味で鍛えてたら最強の人間って呼ばれるようになったからね。

ふふん、小猫さんがんばりなさい。

第24話（ギヤスパ・ヴラディ）

僕の新しい段ボールはすごく快適だ。

お姉さんの宝物の一つ。それも世紀の大怪盗と歌われたアルサーヌ・ルパンのコレクションを借りて、段ボールの中はILDKぐらいになっている。

その宝物の名前は胸いっぱいの愛をというものらしく、魔法のランプっぽい見た目をしている。流石のアザゼル先生も知らなかったそうで、よく僕にコレクションを見せてくれと言ってきます。

でも、そんなことしたら僕の段ボールが狭くなっちゃいます。べつに狭くてもいいけど、いつでも使える一人部屋は手放したくないです。

「小猫ちゃん、どうかしたの？」

「…別に…」

なんだか元気がない小猫ちゃん。リアス部長と一緒に冥界へ帰るのは何度も経験しているのに、どうして今年は元気を無くすのか。

たぶん、お姉さんに会えないからだ。小猫ちゃんのお得意様で、僕のセイクリッド・ギアを抑制するメガネを用意してくれた優しい女の人だ。

三大勢力と禍の団、他神話の勢力もお姉さんの稀有な力を狙っている。なにより僕に時間拳と呼ばれる時その物を教えて、無駄なパワーの発散方法まで考えてくれたんだ。

それほどお姉さんは僕たちにとって大きな存在で、イツセー先輩やアーシア先輩もユート先輩もお姉さんに感謝している。ただ、どうしてか朱乃先輩だけがお姉さんと話したがるな。

それが、とても不思議だ。

〈オカルト研究部〉

今日の授業参観は恥ずかしかった。確かに僕は引きこもりで女装するのは好きだけど、お姉さんのいるところで発表なんて無理すぎるよ。

リアス部長の幼馴染みで親友のソーナ会長は魔法少女のコスプレをしたセラフオルー・レヴィアタンさまとミルたんは絶叫し、サジ先輩に手厚く真摯に介抱されていた。たぶん、あれが身内つてバレたら僕は二度とお外には出ない。そして、ゼノヴィア先輩のところは特にすごかったテレビ局のカメラマンが持つてそうなカメラを持ったお姉さん、その隣の魔法少女ミルたんと普通に会話しているのだ。

イツセー先輩とユート先輩は他人のふり、アーシア先輩と小猫ちゃんは困惑し、リアス部長は呆れて、朱乃先輩はニコニコと、魔王様や墮天使の総督に大天使さまがいるの

に平然とするお姉さんとミルたんはすごい。

僕はあるところの一秒も居たくない。それなのに小猫ちゃんは動かず、僕の段ボールを抱えたままカメラで撮影されている。

やめてよ！はずかしいよ！と段ボールの中で訴えているのに「うるさいですよ、ギヤークン」と段ボールを揺らされ、もう無理だと段ボールから顔を出す。

えと、あ、あはは、すぐ戻りますね。

なんか、すごく死にたくなってきたし。

僕みたいな吸血鬼って、どうやったら死ぬのかな。あとでお姉さんかリアス部長に聞いてみよ。ああ、ホントに恥ずかしいい！！！！

冥界合宿のヘルキヤツト

第25話

?月*日

早朝、グレモリーさんたちを見送る。アルジエントさんと挨拶を交わすゼノヴィアさんを見守りつつ、やたらと話しかけてくるアザゼルを睨む。

こちらとら人妻（仮）ですが？元カレだからって調子に乗っていると怒りますよ？と伝えたら「相も変わらず我の強えやつだな、おまえは」と言われた。

それが私の美德だ。

私を守るように前に立ってアザゼルを見下ろすミルたんにキュンとする。ふふん、どうよ、どうですか。私の旦那さまは優しいだろう。

予め互いに照らし合わせていた時間に来ず、知らない女の人たちを侍らせていたお前とミルたんは違うのだ。私は謝られただけで許すような軽い女じゃないぞ、さつさと冥界に行つてしまえ。

なんとも言えない表情を浮かべるアザゼルに、べーつと舌を出して煽る。兵藤さんが「お姉さんの精神が幼くなってる!？」と変なことを呟いた。ただ、あんまり普段と変わら

ないのだが？

それに私はミルさんと結婚するからアザゼルとなんか復縁してやらないもんね。ちなみにゼノヴィアさんも娘のまま天界から引き取るので宜しくな。

？月10日

私って誘拐されるほど有名だったのかと驚きつつ、兵藤さんのライバルさんと着物姿の猫耳さんを見る。ちよつとだけ触ってみたいけど、私は巫女でも何でもないので無理だ。

そんなことを考えながらライバルさんの話を聞けば兵藤さんの使った玉璽を借りたらしい。いや、それは小猫さんが持つてるし、なんなら所有権だって小猫さんが一番だと思っわよ？

私の言葉に納得して拘束を外すライバルさん。なぜかモジモジしている猫耳さんに話しかけると「あたしの妹がお世話になってるみたいで、その感謝してるにゃ…」と言われた。

いもうと、妹とは？

いったい、誰のことだろうか。この猫耳さんと似たような雰囲気なのは小猫さんしかないけど、どうも胸が似ていない。

ちらりと猫耳さんを見れば話を聞きたくて仕方がないと言わんばかりに尻尾が

揺れ、猫耳も狂喜乱舞しているのだ。

えと、どこか話せる場所にいこつか？

?月〇日

う。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。つ、ゼノヴィアさんのアイス食べちゃった、ぜつたいに嫌われるうううつ。とミルたん泣きついたら手作りアイスキツトをくれた。

な、なるほど、これを使ってゼノヴィアさんと一緒にアイスを作ればいいのね。ミルトんのぶんも作るから楽しみにしててね。

いざ行かんとリビングにいるゼノヴィアさんに手作りアイスキツトを見せたら面白そうだと笑顔になつてくれたけど、私がアイスを作ることになった。

ひーん、なんでこうなるのおおつ、とミルたん聞いたら「ゼノヴィアちゃんのアイスを取るのはいいことよ、しっかり作るんだによよ」と沢山のアイスの材料を持ってきた。

私もミルたんとはゼノヴィアさんのアイスが食べたいのに、ふたりだけ私の作ったアイスを食べるなんてズルいいいつ。

第26話

「月曜日

ゼノヴィアさんが出掛けてしまった。ウジウジと家の中で拗ねていると猫耳さんが小猫さんを迎えに行くから着いてきてほしいと頼んできた。

そういうのは姉妹の蟠りを解消しなさいな。迎えに行くんじやなくて話し合いに行くんだって考えるのよ、小猫さんも会いたかったに「迎えに来た」だけで説明するなんて無理なもの。

私の持つてる業鏡を貸してあげるから互いの悪いところを互いに見せ合つて、その後で一緒に暮らせるのかを問いなさい。

そうじやないと小猫さんの気持ちの整理が出来ないし、なにより危ないことに自分の妹を巻き込みたくないでしょう？

あなたの言いたいことも分かる。

それでもグレモリーさんがあなたの代わりに小猫さんを育ててくれた。あなたが悪魔にされたことは許せないかもしれない。だけど、少しだけでもいいの、彼女を信じてあげられない？

「月×日

早朝、ゼノヴィアさんとミルたんが竹を切っているのが見えた。なにしているの？と問いかけると「ナガシソーメンというものをやりたい！」とキラキラした瞳でゼノヴィアさんが話してくれた。

そういえば何年もやってないわね。

いつからだろうか、ソーメンを流さずに食べるようになったのわ。私の知り合いが子供と流しているのを見て、悲しくなってからだな。

この話はやめよう。

「月×日

ゼノヴィアさんはソーメンばかり食べてるけど、市販のめんつゆ、アレンジを加えためんつゆ、どちらが好きなのかはイマイチ謎だ。

あと蚊取り線香にも興味があるらしく、ミルたんと一緒にライターで火を点けたりしている。そんなゼノヴィアさんが可愛くて写メっていたら本棚の二つがゼノヴィアさんのアルバムで埋まってしまった。

ただ、教会での習慣なのか。

ときおり聖歌や讃美歌を口ずさんではグレモリーさん家のコウモリを落としている。私が歌っても特に落ちてこないのは純粹に音痴だからだろうか。

そんなことを考えたりしながら私の使っていた浴衣を着たり、ミルたん製の寛平を着たり、いろいろなことを試しているゼノヴィアさんが天使すぎて、祈るのがやめられな
い。

ミルたんも私の感動に共感してくれるけど、そこまで取り乱したりしていない。むしろ私のせいで心配ばかりさせてしまつて申し訳ない。だが、しかし、ミルたんに貰つた指輪を外すつもりは絶対はない。

ふふん、真夏に結婚つていうのもありだな。

私のにやけ顔が変だったのか。クスクスと面白そうに楽しそうにた笑いながらゼノヴィアさんは「だらーんとしてるな」と言つてくるけど。

そんな言葉もへっちゃらなぐらい私は幸せに包まれているのだよ、ミルたんとゼノヴィアさんのおかげで私は幸せいっぱいなの女になれたよ。

ふたりとも、ありがとう。

第27話

中々月日

私のゼノヴィアさんが遊びに行ってしまった。確かに友達と楽しく遊んで笑顔になったゼノヴィアさんを見るのも楽しいけど、私がついていけないなんておかしいじゃないのさ。

そりゃさ、私にだってプライベートはある。もちろんゼノヴィアさんにだってある。それでも愛娘と過ごしたいって思うのは変ですか？

うう、さびしいよおお…。

そんなことを言いながらメールを見ると『この野良猫は反省中です』という看板をぶら下げ、小猫さんに睨まれている猫耳さんが映っていた。

どうやら和解できたようだ。

グレモリーさんと並んでる金髪の人がフェニックスさんだろうか？と考えながら豪華な食事を楽しむ兵藤さんたちの写真を見る。

もしかしたら、この写真の中にゼノヴィアさんがいたかもしれないのよね。小悪魔なゼノヴィアさんも可愛いかも、いや絶対に可愛いな。

やっぱり、ゼノヴィアさんが一番かわいい。

年月日

早朝、まだ眠いのには兵藤さんの「アーシアが、アーシアが知らない男にいいいいっ!!」という言葉だけが録音されていた。

小猫さんのメールを要約するとアルジエントさんが助けた悪魔がアルジエントさんに土下座し、自分の不手際のせいだと謝罪したそう。

あと兵藤さんは発狂しているけど、その悪魔は熟女好きで有名らしく、アルジエントさんは許容範囲の外なので問題はないとのことだ。

ただ、アルジエントさんは兵藤さんに心配されたのが嬉しくて笑顔のまま、そのせいで兵藤さんは勘違いしてしまっている。

なんかギャグ漫画かな？

その程度の感想しか浮かんで来ないけど、ゼノヴィアさんは「こいつ、私の居た教会のマザーを誘惑していた悪魔だ」と指差し、沢山の聖水と十字架を投げられていたことを教えてくれた。

それから彼の名前がディオドラ・アスタロトということ、私も範囲に入っていることを教えられた。私は二十代だぞ、熟女なんかじゃないもん。

年月日

第28話（アーシア・アルジェント）

私の助けた悪魔——。

ディオドラ・アスタロトさんは歳上の女性が好きな変態さんでした。イツセーさんや部長は「アーシアに近付くな」と言ってくれて、私は幸せいっぱいになっちゃってます。

その後は小猫ちゃんのお姉さんがパーティー会場に登場し、自分の潔白を証明すると言いながらゴーキョウという鏡を掲げた瞬間、私は小猫ちゃん達の過去を余すところなく見てしまいました。

そして、主殺しの汚名を被せた貴族の関係者は魔王様たちによつて捕まって、イツセーさんは小猫ちゃんのお姉さんの胸を凝視しています。

確かに大きいですけど、私だつて……！

うう、やつぱり、なんでもありません。私は自分のちっちゃな胸を触りながらイツセーさんを見ます。いつか、イツセーさんが喜ぶぐらいおつきくします。

〈グレモリー家“庭園”〉

私の新しくなったセイクリッド・ギアの姿を見たアザゼル先生は「あいつと別れたの

は失敗だったか」と言いながら唸っています。

あいつというのはお姉さんのことなのでしょうが、はつきりと言つてしまえばアザゼル先生にお姉さんは勿体無い女性です。

あれほど相談事を真摯に聞いてくれる人と、自由奔放に女の人を連れ歩くアザゼル先生は不釣り合いだと、イツセーさんは仰っていました。

イツセーさんは未だにバランス・ブレイクへと到っていないことを危惧していました。が、お姉さんのアドバイスで到るための道筋は見えたそうです。

ただ、私の近くに来ては離れることを繰り返すのがバランス・ブレイクへ到る方法なのでしょう。かとリアス部長に聞けば「いずれアジアも分かることよ」と励ましてくれました。

〈レーティングゲーム〉控え室〉

イツセーさんは私とのチューでバランス・ブレイクを成し遂げ、ソーナ会長の兵士である匙さんとの一騎討ちに挑みました。

しかし、その匙さんもレーティングゲームの最中、ソーナ会長へ愛の告白を叫び、黒い龍脈の亜種の禁手化濁き満たされぬ龍脈アブソルバーゴレビヨンドとなりました。

そして、匙さんのバランス・ブレイクの能力は吸収のみを追求し、空間そのものを『削る』ように吸収して、イツセーさんの横腹や太ももを見えないなが『削ぎ』取つて

いく。

私も回復に徹してイツセーさんを癒し続け、気がついたら医務室にいました。私が最初にリタイアしたんですね、としよんぼりしていると画面の真ん中にイツセーさんが映りました。

もう、歩くことも立つことも儘ならなくらいボロボロなのに匙さんに突撃し、もはや体当たりで吹き飛ばすだけの特攻しか出来ていないのに。

イツセーさんは「俺はアーシアのためなら無限に強くなれるんだアアアアアッ!!」と叫んで匙さんを倒してしまった。

えへへ、うれしいです。

私のいるベッドの隣に現れたイツセーさんにヒーリングを施し、ゆつくりと肉体のパーツを再構築する。お医者様はフェニックスの涙を垂らし、私のヒーリングを補助してくれませう。

「…アーシア……だいすきだあ…」

「わたしも、私も大好きです、イツセーさん」

第29話

三月四日

ミルたんが女の人といった。

うそ、うわき?と絶望しながら見ている会長さんのお姉さんだ。それに、よく見ればミルクィ原作者のサイン会の列に並んでいるだけだった。

私の早とちりか。

ゼノヴィアさんもミルクィのサイン会に興味を持っているものの商店街の期間限定スイーツを食べて、プルプルと震えながら「甘くておいしいっ」と笑みを押さえられない。

ふふん、そうでしょう。ここは私の学生の頃からの行きつけで、いつも一人だったせいで「今日も一人かい!」なんて言われていた場所だ。

まあ?今の私にはミルたんとゼノヴィアさんがいるから悔しくも悲しくもないのだけれど、あの時の悲しみは忘れてないからなとマスターを見たら「おう、いつものか?」とパフエが出てきた。

うっ、そんなことしても許して、私のパフエだからね?ゼノヴィアさんのじゃないか

らね？ちよつと待つて、私まだ食べてないから、ね？

ねえ、聞いている？

ううつ、ひどいよおおお…。

Ⅲ月十日

私のパフェの恨みを味わえとゼノヴィアさんにコンビニで買ってきた大量のスイーツを与えて、ぽっちやりさんにしてやる。

そう意気込んだのに私の方が余計に増えてしまい、ゼノヴィアさんはグラム程度しか変わっていない。おかしい、なんで、こんなことに……。

ほんのちよつぱり仕返ししようとしただけなのに、このままだと私がぽっちやりさんになつちやう。こつそり、ミルたん相談するとミルキーのダンスをオススメされた。

私は出来る女つて感じやってきたのに、ゼノヴィアさんというと緩んじやうのはなんだろうか。ミルたんに合わせて腰を振り、ターンしながらミルキーの決めポーズをする。

その途中からゼノヴィアさんも混じり、三人でテレビの中で指示してくるミルキーに従つて、さまざまポーズや動きを繰り返す。

ふふん、どうかしら？とミルたんの作つてくれた衣装を着たら胸とお腹の辺りが少しキツくて泣きたくなった。

もう、こんなに太っちゃったのか。

Ⅲ月 日

早朝、久しぶりに兵藤さんを見た。

私のお腹を見るなり「おめでとうございます!!」と言われた。いや、まあ、うん、そうだね。私としては嬉しいけど、ミルたんがなんとも言えない表情してるから待つてほしい。

ミルたんは「妊婦さんじゃないによ、ぽっちゃりさんなんだによ」と兵藤さんの言葉を否定するけど、私ならマジで産めるよ?と言ったら真顔になった。

ふふん、明日になったら驚くぜ?とだけ伝えて寝室に籠る。やべーよ、どうしよう、私って臨獣オーストリッチ拳使えたっけな。

と、とりあえず、やってみるか。

あれ、なんか行ける気がする。

がんばれ、私よ。

母性本能を覚醒させればゼノヴィアさんのかわいい妹を誕生させることができるはずだ。私の母性よ、うなれええええつ。

第30話

□月▼日

ソツとリビングにいるミルたんとゼノヴィアさんに「ホントに出来ちゃった☆」と言ったらミルたんが気絶してしまった。そりゃか、まさかのできちゃった婚になるとは思わなかったわよね。

腕の中で寝ている赤ちゃんにゼノヴィアさんは興味津々らしく、人差し指でツンツンしながら「お、おおつ、これが私の……どっちだ？」と性別が分からず首を傾げている。私はミルたんの揺すつて起こし、あなたの子供よと言ったらまた気絶した。普段は頼りになるのに突然のことや有り得ないことには弱いよね。

そんなことを考えながら「うむむ、どっちなのだ？」と未だに悩んでいるゼノヴィアさんに「妹よ、お姉ちゃん」と微笑んで赤ちゃんを見せる。

その後はゼノヴィアさんの「私に妹が産まれたぞ！」という電話を受けて、魔王様や天使さま、それとアザゼルがやって来た。グレモリーさんたちも赤ちゃんを見てキヤーカーしている。

しかし、アザゼルの呟いた「こいつの名前はなんつうんだ？」の一言で命名の権利

を巡ってゲーム大会が開催されてしまった。

□月ε日

我が娘の命名の権利を勝ち取ったゼノヴィアさんの命名によって娘の名前はカリンに決定し、アザゼルの考えたアザゼル二世は最初から省かれていた。

しかし、ゼノヴィアさんはカリンに読み聞かせるのは良いのだけれど。天使さまに貰った聖書やアザゼルから押し付けられた玩具を見せるのは、ああ魔王さまからのチエスの駒を渡そうとしないで…。

私のマイエンジェルが二人になったのは嬉しいのだが、ミルたんが抱っこすると高確率でゼノヴィアさんがズルいと言いつ出す。

確かに私達もミルたんを抱っこされない。

そんなことを考えているとカリンさんが泣き出し、私のところに戻ってきた。うむ、カリンさんも可愛いけど、ゼノヴィアさんもかわいい。

そろそろ新しい本棚を買おうか。

□月〇日

我が家に騎士ガンダムが加わった。

スペリオルカイザーZからの出産祝いだろうかと神棚を見たら蚊に向かってラストシューティングしていた。それは過剰攻撃なのではないだろうか。

あと私は僧侶ガンタンクじゃないわよ。ゼノヴィアさんは騎士ガンダムと剣を交わし、ミルたんはマジの魔法を習っている。

カリンさんに私達も早く混ざれるようになろうねと喋りかけながらステッキに跨がり、とうとう空を飛べるようになったミルたんを見上げる。

あなたのお父さんは、どこへいくのかしらね？と言いつつハイテンションで騒いでいるミルたんにお玉を投げ、ご近所迷惑だから静かにしなさいと怒る。

私だつて飛んでみたいのにズルいわ。

第31話

エ月%日

私の娘を眷属に加えたいと宣った悪魔の家が取り潰しになったという話をグレモリーさんに聞いた。しかも魔王さまたちとグレモリーさんによる圧力らしく、なんだか申し訳無くなった。

あとゼノヴィアさんがカリンさんに夢中になりすぎて、休み時間になると写真ばかり見ているそう。私も同じようなことしてるからなにも言えない。

ミルたんは甘やかさずに怒ってくれる。

ただ、私が怒られるのは可笑しいのではないだろうか。ほんのちよつと喜んでもらうと頑張ったけど、騎士ガンダムだって手伝ってくれたのよ？

私達なりにカリンさんやゼノヴィアさん、なによりミルたんへの感謝を伝えようと頑張っているだけなのに、ミルたんたら照れるんだもの。

なぜか私の話を聞いていた小猫さんはコーヒーを飲んでおり、どことなく達観したように甘えてくる自分の姉である黒歌を撫でている。

あれね、立ち位置が逆転してるわね。

エ月・日

なんで私を狙ってくるのかしら？と疑問に思ったことを聞いたら三大勢力の中心に立っているからだと言われたが、普通に蚊帳の外ですが？

どこで聞き間違えたら私がリーダーだってことになるのよ。私はどこにでもいるような女だし、筋力なんてアルジェントさんと同じぐらいしかないのに…。

そんなことを言い付けていたら半泣きになつて帰つてしまった。いったい、あの人はなにがしたかつたのだろうかと考える。

まあ、変な人の考えていることなんて分からないのでやめておこう。それよりもゼノヴィアさんが帰ってくる前に焼けてしまった布団を、どうやって誤魔化すかを考えないといけない。

こんなところで火遊びしないでほしいわ。

エ月・日

小猫さんがやって来るなり唐突にゼノヴィアさんへ襲い掛かった。何事かとゼノヴィアさんを庇いながら話を聞けば限定品の和菓子を食べってしまったらしい。

いや、でも、昨日のことならゼノヴィアさんはカリンさんと遊んでいたから外出してないわよ？それに小猫さんのものを取るなんてゼノヴィアさんがするとは思えない。

私の言葉に納得できるところがあつたのか。

小猫さんは拳を下ろして、ゼノヴィアさんに真偽を問う。私が言ったようにゼノヴィアさんは家にいたのだが、そうなると和菓子を食べたのは誰なのか。

そんなことを話していると口元にアンコをくっつけた黒歌さんが入ってきた。

なるほど、あなたが犯人なのかと納得し、小猫さんとゼノヴィアさんが代わりものを用意するまで帰ってくるなど閉め出した。

ああ、かわいそうに…。

私も二人の食べ物を取らないように気を付けよ。そう思いながら黒猫になって切なそうに「にやー、にやー」と鳴き続ける黒歌さんを家に入れて、一緒にケーキを作りましょうと話しかける。

第32話（塔城小猫）

私はリアス部長の夫であるライザー・フェニックスさまの用意してくれたVIP席にてパーティーを楽しんでいるとスタッフに変装していた姉様の登場によって会場は大混乱——。

しかも自分の潔白を証明するためにやって来たのだから余計に会場は混乱し、姉様は『業鏡』と呼ばれる所持者の過去を俯瞰して見せる道具を使った。

そのアイテムを使えば悪魔の不始末や危険分子を排除できると魔王さまは言っていました。なぜか鏡は姉様から離れず、ゆっくりと体内にめり込んでしまったのです。それに私の寂しさを味わってもらうため、姉様は魔王さまの用意した部屋に監禁されている。もつとも脱け出そうと思えば抜けられる程度の監禁だ。

「白音え〜つ、あつたかいにやあぁ…♪」

とても私を置いていった姉様とは思えない。ここまで、だらけると言うことは鏡に映っていたものは真実なのだろうか、それとも姉様の妄想か都合よく書き換えたのかも分からない。

そう分からないけれども私は姉様と一緒にいれるのなら幸せです。本人には言いま

せんけど、私はお姉さんのおかげで姉様よりも強くなっています。

もしも逃げたら手足をへし折って、私の家から出られないようにしちやいます♡とイツセー先輩に言ったらアーシア先輩に泣きついていました。

〈駒王町”マンション”〉

私は姉様と暮らせるようになった。

そのことをお姉さんに報告しようとかを訪ねたら新しく住人が増えていた。ミルたんとお姉さん、ゼノヴィア先輩は家族が増えたと言っています。たった一ヶ月ほどで人は産まれるものなのだろうか。

そんなことを考えながら姉様を紹介したら普通に知り合いだったらしく、姉様から「あたしのマブダチにやっ」と逆に紹介されて何も言えなくなった。

ただ、調子に乗ってお姉さんにチューした姉様に怒りが爆発してしまい、私は気が付いたら玉璽の新しい力を、神獣虎燐魄を纏った轟大帝となっていた。

お姉さん曰く「真の担い手として認められた」ということらしく、私はイツセー先輩よりも先に玉璽に認められたのです。

それは、すごく嬉しいですけど。

いきなり重々しい鎧に包むのは勘弁してほしい。私は悪魔の駒のおかげで力持ちですが、地力は普通の女の子と変わらないぐらいか、ほとんど同じ程度しかありません。

私はまだまだ強くなれる。それを知れただけで満足ですが、姉様は子供のように私と同じものが欲しいと騒ぎ、お姉さんに子供のを欲しがるなど怒られていました。

むう、まだ子供扱いなんですね。

それでも良いですが、私だって高校生なんですからね？と言ったらゼノヴィア先輩も「私も高校生だぞ？」と話に加わり、ミルたんは赤ちゃんにミルキーを見せながら「喧嘩するなら外でするによ」と言っています。

姉様は野良猫なので外へどうぞ。

「…まったく、やれやれです……」